

植物園北遺跡発掘調査概報

昭和59年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序

平安京建都以来、約 1200 年にわたって我が国の政治、経済、文化の中心として栄えてきた京都市は、数多くのすぐれた文化遺産を有しています。

このような、文化遺産を土台としながら、京都市は 21 世紀に向かって新しい文化を創造し続ける活力ある都市を目指して、発展を図っていかねばなりません。

このような中であって、埋蔵文化財の果たす役割も重要なものがあります。

このため、本市では埋蔵文化財の保存を図るとともに、保存し難い遺跡については、調査を行い、その成果をできる限り、後世に伝えるよう努めております。

この調査概報は、昭和 59 年度国庫補助事業として実施した発掘調査の結果をまとめたものでありますが、本書が、埋蔵文化財の研究や学習に広く活用していただければ幸いです。

本調査の実施に当たり、調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、又御指導いただいた文化庁をはじめ御協力をいただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和 60 年 3 月

京都市文化観光局

例 言

- 1 本書は、昭和59年度文化庁国庫補助事業に伴う植物園北遺跡発掘調査の概要である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 発掘調査は1箇所実施した。調査次数は3次である。
- 4 図中に示したX・Y数値及び方位は、平面直角座標系VIによる。標高は海拔高T. P.を用いた。
- 5 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図（2500分の1）の幡枝・植物園を修正して使用した。
- 6 本書中の写真は、遺跡・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 7 本書の執筆・校正は、辻 裕司、木下保明が担当した。

目 次

1 調査経過	1	3 遺 物	5
2 遺 構	1	4 ま と め	8

図版目次

図版一 遺跡 調査位置図	図版六 遺跡 1 3号住居址全景
図版二 遺跡 竪穴住居址実測図	2 4号住居址全景
図版三 遺跡 竪穴住居址実測図	図版七 遺物 1～4号住居址・SD5出土土器
図版四 遺跡 1 調査地遠景	
2 調査区全景	
図版五 遺跡 1 2号住居址全景	
2 1号住居址全景	
3 1号住居址土器出土状況	

挿図目次

図1 調査区平面図	2	図3 1～4号住居址・SD5出土土器	6
図2 SK1実測図	4	図4 2・4号住居址出土鉄製品	7

植物園北遺跡 3 次調査

1 調査経過

調査地点は北区上賀茂蟬ヶ垣内町47に所在する。当該地にマンションが新築されることに伴い事前に発掘調査を実施した。発掘調査に先立ち、遺構の遺存状況を確認するうえで昭和59年2月27日に試掘調査が実施され、その結果遺物包含層及び竪穴住居址等の遺構が検出され、遺存状況は良好であることが確認された。

植物園北遺跡は、植物園及び植物園北方一帯の鴨川扇状地上に立地する弥生時代後期から古墳時代にかけて展開された一大集落址である。この遺跡は昭和54年から3年間にわたる公共下水道敷設工事に伴う立会調査によって遺構が確認され、竪穴住居址・溝・土壇など各期にわたる多種多数の遺構が検出されている。その後2度にわたり発掘調査が実施されたが当該期の遺構を検出するには至らず、植物園北遺跡における竪穴住居址等の平面形態・構造及び構成等具体的な様相を把握するうえでも遺構の検出が待ち望まれていた。

調査は昭和59年4月9日に開始し、5月22日に終了した。調査対象地の面積は約674㎡あり、このうち約389㎡について調査を実施した。

2 遺 構

調査区の基本層序は、耕土・床土が15～24cmあり、床土下は第1・2層が堆積する。第1層は明褐色泥砂で厚さ4～10cmある。第2層は暗褐色砂泥で厚さ2～6cmある。第1・2層は後述するSD5上面から南に堆積し、南に向かって厚く堆積する。第1・2層からは縄文時代晩期から鎌倉時代までの遺物が出土した。第2層下は地山の褐色砂泥となる。

遺構は褐色砂泥の上面で検出した。検出した主な遺構には竪穴住居址4戸、溝及び流路6条、土壇1基などがある。

1号住居址(図版二・五一2・3) 調査区西端で検出した。西半部は調査区外にあり未調査である。住居址の北半はSD5や近代の溝などによって床面直上まで削平を受ける。平面形は方形を呈すると考えられ、住居址北東辺の現存長は5.20mある。検出面から床面までの深さは南端付近で30cmある。壁溝は調査部分では全周する。幅18～30cm、床面からの深さ3～7cmある。主柱穴は1箇所あるが、本来4主柱と考えられる。柱穴の平面形は楕円形を呈し、長径50cm、床面からの深さ70cmある。中央に径24cmの柱当たりを有する。遺物は南東壁付近の床面に密着した状態で甕・器台(図3 5・9)などが出土した。

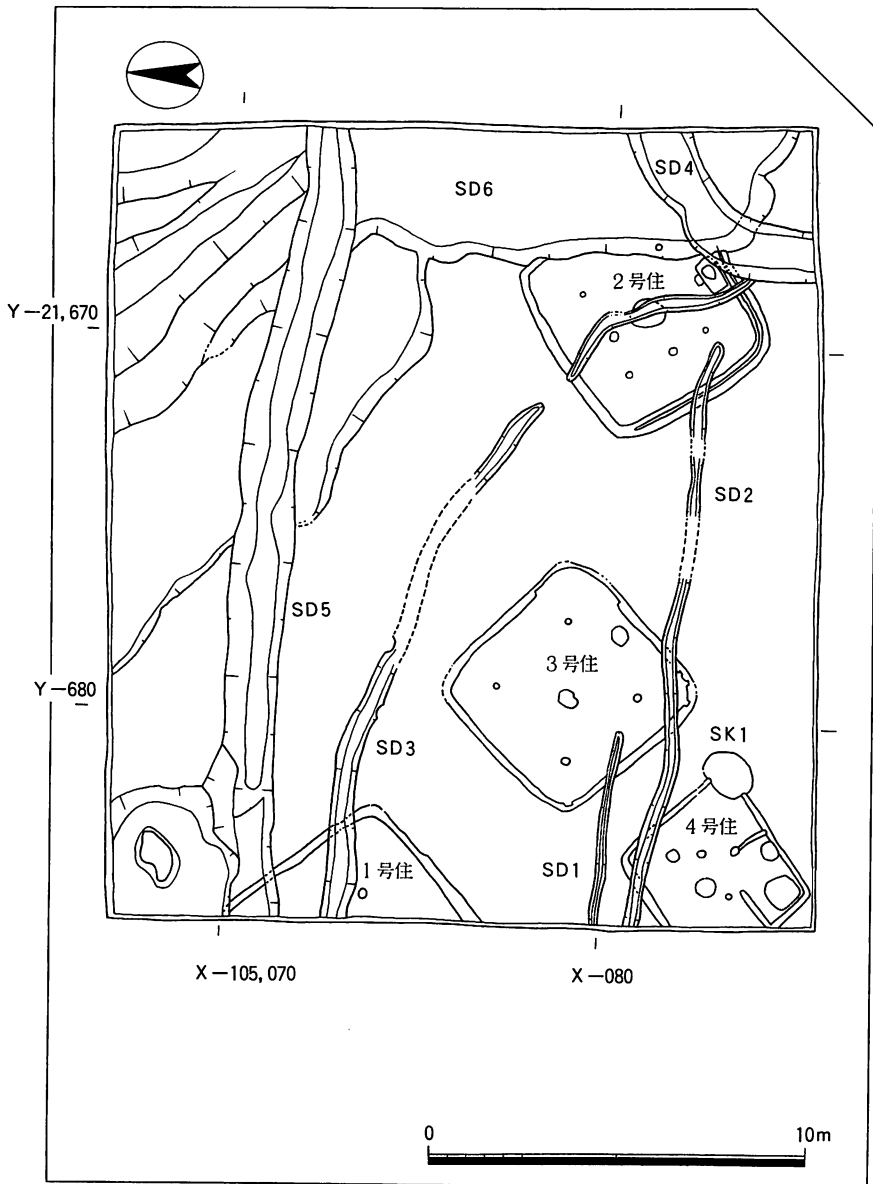


図1 調査区平面図

2号住居址(図版二・五一・1) 調査区の南東部で検出した。平面形は方形を呈するが各辺の中央部はやや外に張る。南東部はSD6によって削平を受ける。南西壁体下及び南東壁体下には2条の壁溝が巡る。各支柱穴と壁溝間の距離と、内壁溝と支柱穴間の距離がほぼ等しいことから、内壁溝が本来の壁溝であり、南西及び南東側へそれぞれ拡張し、外

壁溝を新たに掘削したと考えられる。検出面での規模は、北西—南東間5.31mあり、内壁溝は南西側30cm、南東側25cm内側に位置する。壁溝は調査部分では全周する。内壁溝は幅12~28cm、床面からの深さ5~8cmある。外壁溝は幅20~27cm、床面からの深さ3~7cmある。主柱穴は4箇所ある。平面形はほぼ円形を呈し径23~34cm、床面からの深さ42~50cmある。それぞれほぼ中央に径13~17cmの柱当たりを有する。柱当たり心々間の距離は、P1より右回りで2.40・2.52・2.35・2.46mある。P2—P3間にP5が、P3—P4間にP6がある。補助柱と考えられ、径20~26cm、床面からの深さ6~10cmある。床面中央にピットが1箇所ある。平面形は楕円形を呈し、長径92cm、短径74cm、床面からの深さ16cmある。南東辺中央の内壁溝に接して貯蔵穴が1箇所ある。平面形は長方形で2段落ちを呈し、上縁で長軸98cm、短軸56cm、床面からの深さ32cmある。貯蔵穴の長縁に接してピットが1箇所ある。床面からの深さ16cmある。遺物は床面及び中央ピット・貯蔵穴などから、壺・鉢(図3—1~3・7)・鉄鏃(図4—1)などが出土した。なお、P4の北で工作台と考えられる扁平な自然石が1個、及び中央ピットの北で粘土塊が、それぞれ床面に密着した状態で出土した。

3号住居址(図版三・六一) 調査区中央西南寄りで検出した。平面形は方形を呈し、北西—南東間5.32m、北東—南西間5.25m、検出面からの深さ22~30cmある。壁溝は、東・西・南隅で途切れる他は全周し幅14~25cm、床面からの深さ1~3cmある。主柱穴は4箇所ある。平面形はほぼ円形を呈し、径25~32cm、床面からの深さ40~52cmある。それぞれほぼ中央に径16~20cmの柱当たりを有する。柱当たり心々間の距離は、P1から右回りで2.57・2.72・2.54・2.68mある。またP1—P2間及びP1—P4間のほぼ中央壁溝寄りにP5・P6がある。P5は平面形がほぼ円形を呈し、径45cm、床面からの深さ24cmある。P6はほぼ円形を呈し、径約25cm、床面からの深さ13cmある。床面ほぼ中央に地床炉が1箇所ある。平面形は不整楕円形で2段落ちを呈する。長径56cm、短径38cm、床面からの深さ13cmある。地床炉東半の壁面及び床面の一部が熱を受け赤変している。北西壁の北隅部寄り、ほぼ壁溝に接して貯蔵穴が1箇所ある。平面形は長方形で2段落ちを呈する。長軸80cm、短軸58cm、床面からの深さ30cmある。上段壁体面に沿って炭化材がある。また貯蔵穴の周囲は、長軸方向に160cm、及びP4までの範囲に床面より1~5cm程土盛りし、堅固に叩き締めている。床面には炭化材が散在しており焼失住居と考えられる。また床面中央西寄りに熱を受け赤変した箇所が1箇所ある。遺物は床面などから鉢(図3—8)・甕などが出土した。

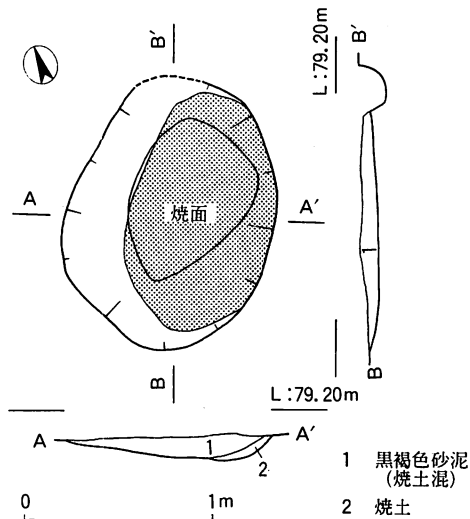


図2 SK1実測図

4号住居址(図版三・六一2) 調査区南西隅部で検出した。東隅部はSK1により削平を受け、西隅部は調査区外にあり未調査である。平面形は、北及び南隅部がやや鈍角のいびつな長方形を呈する。検出面での規模は北西—南東間3.88m、北東—南西間4.20m、検出面からの深さ1~8cmある。壁溝は調査部分では全周する。幅12~24cm、床面からの深さ3~8cmある。住居址の中央長軸方向に主柱穴が2箇所ある。平面形は円形を呈し、径16~23cm、床面からの深さ14~24cmある。

柱穴心々間の距離は1.36mある。またP1の

北及び南にP3・4がある。平面形は円形を呈し、P3は径32cm、床面からの深さ40cmある。P4は径32cm、床面からの深さ14cmある。中央北西寄りにピットが1箇所ある。平面形はほぼ円形を呈し、径50cm、床面からの深さ8cmある。南隅部の壁溝にほぼ接した箇所及び南東壁中央南西寄りの壁溝に接した箇所にそれぞれ1箇所ずつ貯蔵穴がある。南隅部の貯蔵穴は平面形が隅丸の台形を呈し、北西—南東間82cm、床面からの深さ25cmある。南東壁の貯蔵穴は平面形が半円形を呈し、北東—南西間50cm、床面からの深さ9cmある。これら貯蔵穴をとりかこむ状態で溝がある。1条は南東壁溝と直交する溝で、中央方向に長さ84cm延長しP4と接する。1条は南西壁溝とほぼ直交する溝で、中央方向に長さ125cm延長する。溝幅10~22cm、床面からの深さ4~16cmある。遺物は貯蔵穴・床面などから、壺・甕・手捏ね土器(図3-4・6・10・11)・鉢(図4-2)・鉄斧と考えられる鉄製品などが出土した。

SK1(図2) 4号住居址の南東隅部上画で検出した。地床炉と考えられる遺構である。平面形は楕円形を呈し、検出面での規模は、長径145cm、短径108cm、検出面からの深さ24cmある。底部の形状は、ほぼ全体に緩傾斜を呈するが、東辺中央付近はやや急傾斜を呈する。底面から南東肩口までの範囲は熱を受け赤変している。

SD6 調査区北東部に位置する流路である。概ね、調査区北半では北西—南東方向を南半では南北方向を示す。流路底は東に向け漸次低下し、検出面からの深さは調査区北壁で10~115cmある。堆積土は黄褐色~暗褐色系の砂礫層が主体で、複数の小流路が認めら

れる。また砂礫層間の一部には泥砂層が堆積する。流路上面は明褐色泥砂が堆積する。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器などが出土した。

SD5 調査区北寄りに位置し、褐色砂泥及びSD6の上面で検出した東西方向の溝で、東及び西は調査区外へさらに延長する。調査区西端付近では土壌状の遺構に連続する。検出面での規模は、幅110～160cm、深さ35～66cmある。断面形はU字状を呈する。溝底は東に向かって下がり、高低差は約30cmある。堆積土は4層あり、褐色系の泥砂層と砂礫層が交互に堆積する。遺物は、土師器・須恵器（図3 12～16）などが出土した。

SD4 調査区南東隅で検出した。円弧状を呈する溝で、東及び西は調査区外へさらに延長する。検出面では幅132～176cm、深さ10～23cmある。土師器・須恵器などが出土した。

SD3 調査区中央部で検出した、SD6とほぼ同方向の溝である。東端はSD4により削平を受け、西は調査区外へさらに延長する。検出面での規模は、幅30～70cm、深さ4～14cmある。土師器・須恵器などが出土した。

SD2・1 調査区南部で検出した、SD5とほぼ同方向の溝である。SD2・1とも東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外へさらに延長する。検出面での規模は、幅14～30cm、深さ2～8cmある。土師器・須恵器などが出土した。

3 遺物

遺物は各遺構及び第1・2層から遺物整理箱で20箱出土した。遺物内容は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・土製品・陶器・瓦器・輸入陶磁器・鉄製品などがある。このうち1～4号住居址及びSD5から出土した主な遺物について図示した。他は小片である。

1～4号住居址出土遺物には壺・甕・鉢・器台・手捏ね土器・鉄製品などがある。

壺（1～4）（1）は無頸壺である。体部上半は丸みをもち、下半は底部に向かって急激にすぼまる。内外面とも器壁が剥落しており、一部にハケメ調整が認められる。口径9.4cm、器高7.3cmある。（2・3）は球形に近い体部を有し、2は口縁部が直立する。器面は相当剥落している。3の内面底部付近は板状工具によるナデが認められる。2は体部上半外面に弧状を呈するヘラ記号が、約2分の1の破片で3箇所ある。（4）は外上方に直立する口縁部と、球形を呈する体部からなる。口径7.9cm、器高9.1cmある。

甕（5・6）（5）は体部最大径が体部中位にあり、ややずん胴を呈する。口縁部は「く」字状に外反し、頸部内面に稜をなす。内面は横方向の、外面は縦方向のハケメ調整する。口径14.7cm、器高17.5cmある。（6）は所謂受口状口縁を呈する。内外面ともナデを行う。口径14.1cmある。

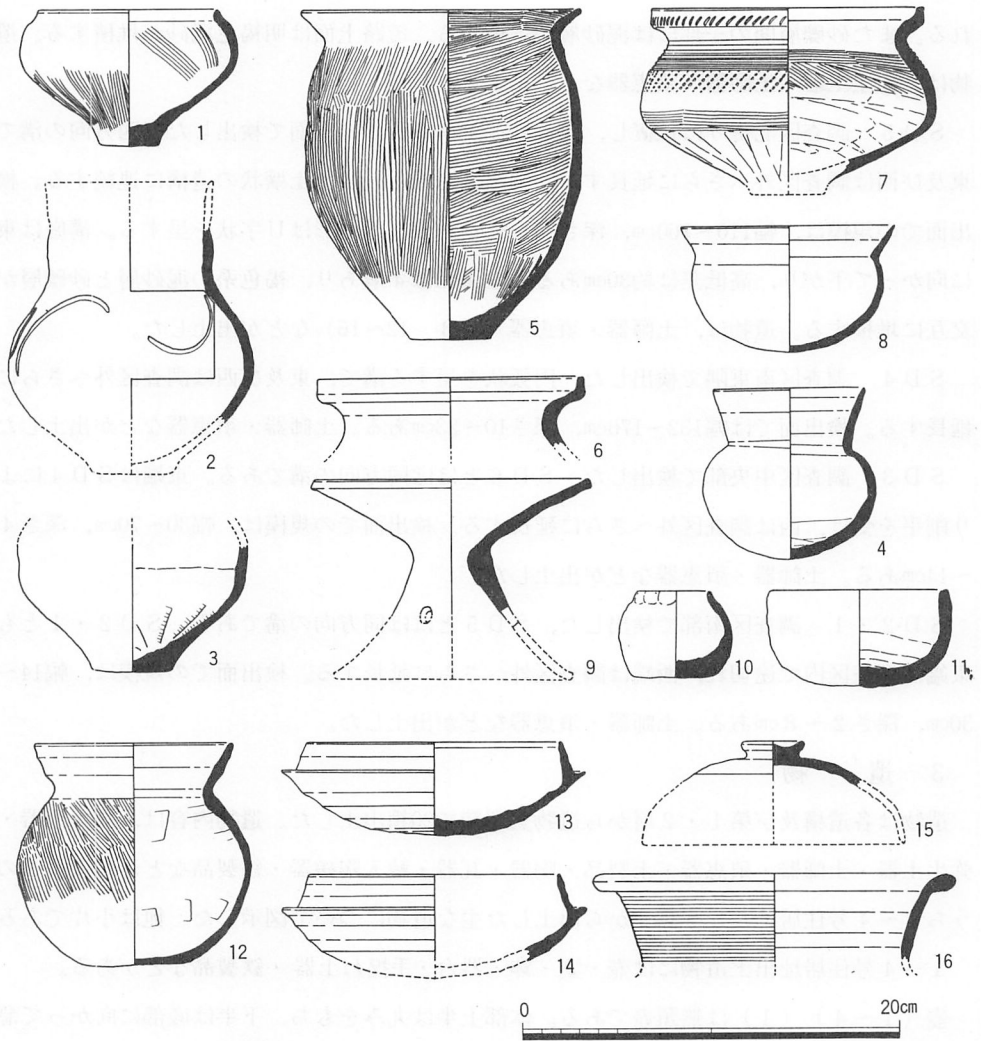


図3 1～4号住居址・SD5出土土器

鉢（7・8）（7）口縁部は所謂受口状口縁を呈する。体部は扁平で底部に向かって急激にすぼまる。口縁部はナデ、体部下半は内外面とも板状工具によるナデ、内面上半及び外面中位はハケメ調整する。また外面には、口縁部下半に刻み目文、頸部から体部上半に横線文及び横線文下方に列点文を施す。口径14.4cmある。（8）は口縁部は短かく直線的に外傾する。頸部内面に稜をなす。体部はやや扁平な球形を呈する。内外面とも器面は剥落している。口径10.3cm、器高6.8cmある。

器台（9）受部は外上方に直線的に大きく開く。筒部は細くすぼまり、裾部は下方に

開く。受部口縁端は平坦面を有する。裾部中に3箇所の円孔を配する。器面は内外面とも相当剝落しているが、外面の一部にヘラミガキが認められる。受部口径14.4cmある。

手捏ね土器(10・11) (10)は壺形を、(11)は鉢形を呈する。10はオサエ、11は内面に強いナデを行う。10は口径3.6cm、器高4.6cm、11は口径9.0cm、器高5.1cmある。

鉄製品(図3 1・2) (1)は有茎鉄鏃である。鏃身の平面形は概ね菱形を呈する。断面形は鏃身が厚さ約4mmの扁平なレンズ状を呈し、茎は1辺約5mmの四角形を呈する。

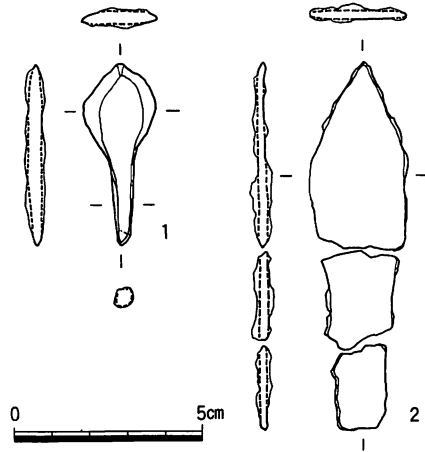


図4 2・4号住居址出土鉄製品

現存長4.8cm、鏃身最大幅1.9cmある。所謂平根式の鉄鏃である。(2)は鉤である。茎下半は欠損していると考えられる。先端部は僅かに彎曲する。身部下半は両端ともやや内彎する。身・茎とも扁平で厚さ約2mmある。現存(復元)長約9.5cm、身部最大幅2.6cm、茎部下端幅1.3cmある。この他図示できなかったが、鉄斧の一部と考えられる鉄製品がある。鉄板の両端を折り込む。内面には木目痕が残る。

SD5出土土器には、土師器(12)、須恵器(13~16)などがある。

土師器甕(12) ほぼ球形の体部と外上方に直立する口縁部からなる。底部はやや歪む。口縁部はややつよいナデを行ない、体部外面は、下半をオサエ、上半をハケメ調整する。内面は、板状工具による横方向の荒いナデを行なう。体部外面にはススが附着している。口径10.4cm、器高12.0cmある。

須恵器杯(13・14) たちあがりはやや内傾する。端部は(13)が内面にヘラ状工具による沈線を施し、(14)は丸くおさめる。受部は外上方にのび丸くおさめる。底部はやや扁平である。底部外面は下半をヘラケズリ調整する。底部内面中央部は直線方向の仕上げナデを行う。13は口径13.5cm、器高5.0cmある。14は口径13.2cmある。

須恵器蓋(15) やや丸みをもつ天井部の中央につまみが付く。つまみは中央部がくぼむ。天井部上位3分の1はヘラケズリ調整する。

須恵器甕(16) 口頸部は外傾し、口縁部は水平方向に開く。口縁端部は肥厚し、玉縁状を呈する。内面はヨコナデ、外面はカキメ調整する。口径18.2cmある。

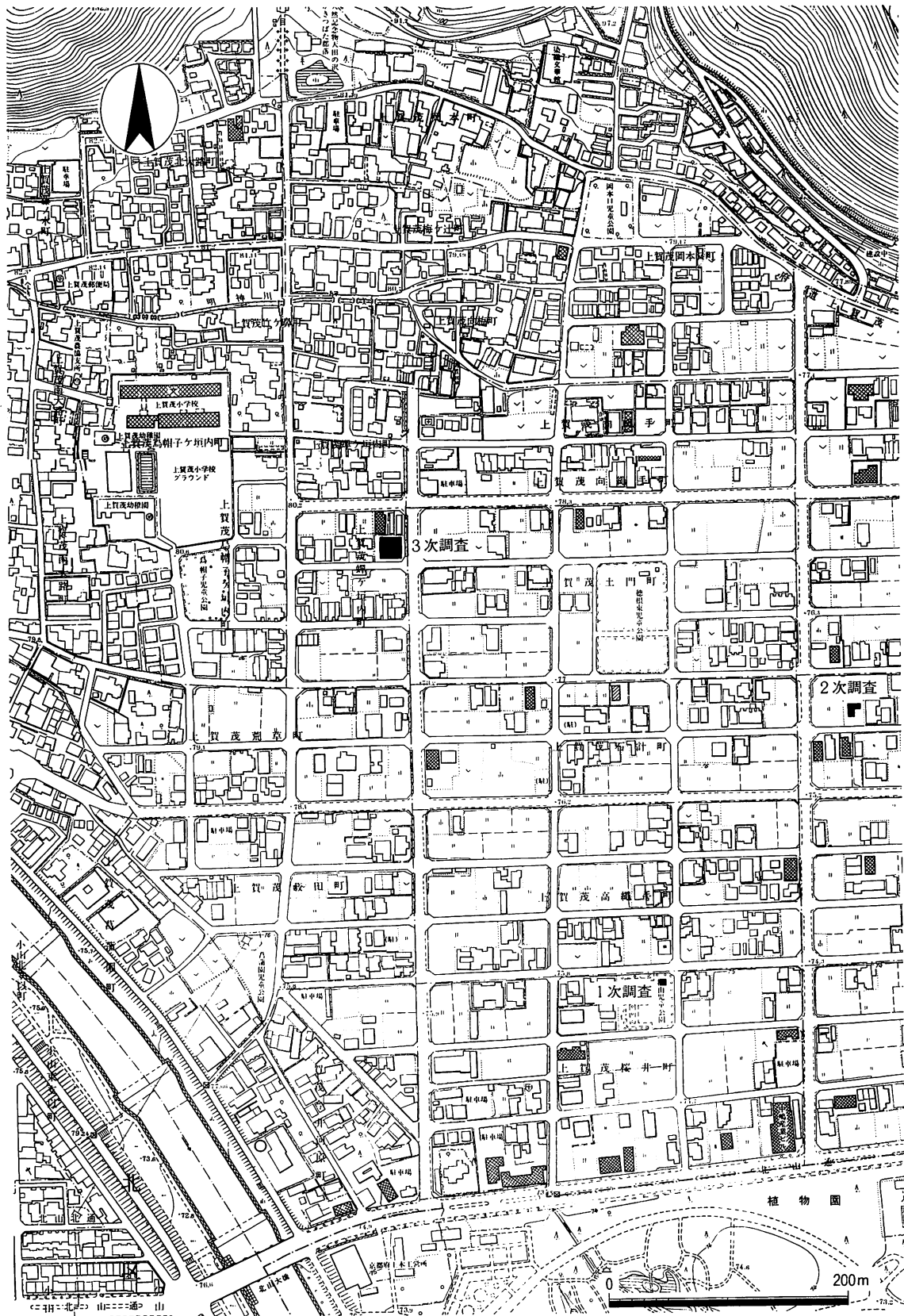
4 ま と め

公共下水道敷設工事に伴う立会調査によってその存在が知られるようになった植物園北遺跡は、推定約100万㎡におよぶ市内でも屈指の大集落址である。立会調査によって弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居が20数棟、古墳時代前期（布留式併行期）の竪穴住居20数棟が確認されており、どちらの時期の竪穴住居も遺跡内のほぼ全域に存在する。古墳時代後期の竪穴住居は数棟確認されているが、この時期の遺構は上賀茂神社の周辺にその分布を限られている。この他、各時代にわたる数多くの遺構が検出された。しかし、遺構の一部のみの観察しかできないという立会調査の制約上、遺構の平面形態・構造・遺物の出土状況およびそれらの有機的な関連を把握することが困難であった。今回の調査は面積が400㎡弱ではあったが、立会調査では果せなかった諸点を明らかにすることができた。以下、今回の調査の成果について述べる。

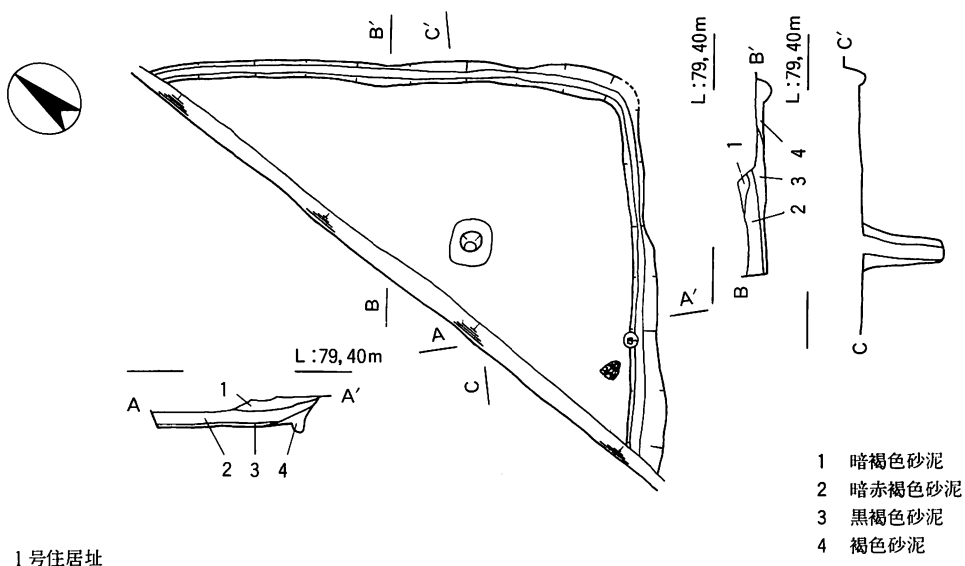
竪穴住居は4号住居を除いて一辺5.2～5.3mの方形を呈し、支柱穴は4箇所、壁溝はほぼ全周する。床面のほぼ中央に楕円形の地床炉と思われるピットを有し、住居の壁のコーナー部または中央の壁溝に接した箇所に平面が長方形で2段落ちを呈する貯蔵穴がある。貯蔵穴の上方の落ちは浅く、3号住居ではこの部分に炭化した板材を検出している。住居の傾きは4棟ともほぼN45°Eである。住居の構造・出土した遺物からみて、1・2号住居が弥生時代後期、3・4号住居は古墳時代前期のものであるが3号住居の方が少し古くなると思われる。

4号住居が廃絶して以降この地点では住居は営まれなくなった。古墳時代後期になるとこの地点はたびたび洪水にみまわれたらしく調査区の北東部は流路（SD6）によって削平を受けている。この流路が埋没したのちに東西方向の人工的な溝（SD5）が形成される。それ以降は包含層として鎌倉時代の遺物を含む土層が検出されるだけで現代にいたっている。

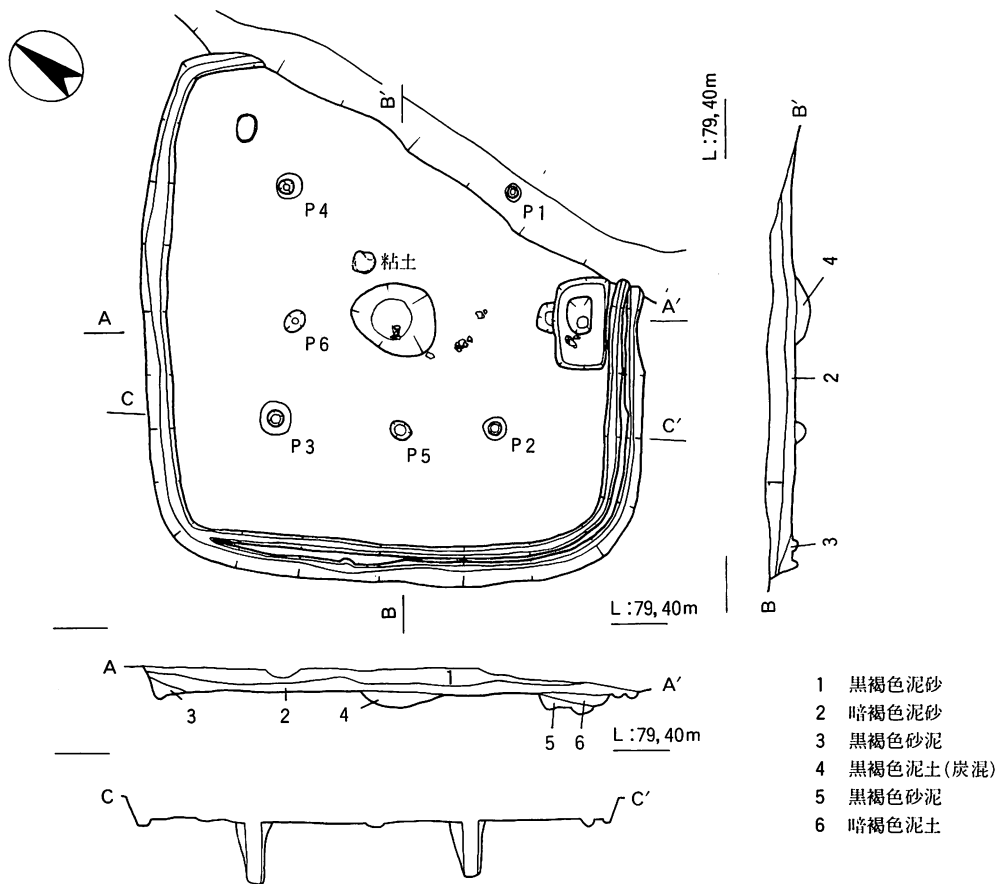
圖 版



調査位置図



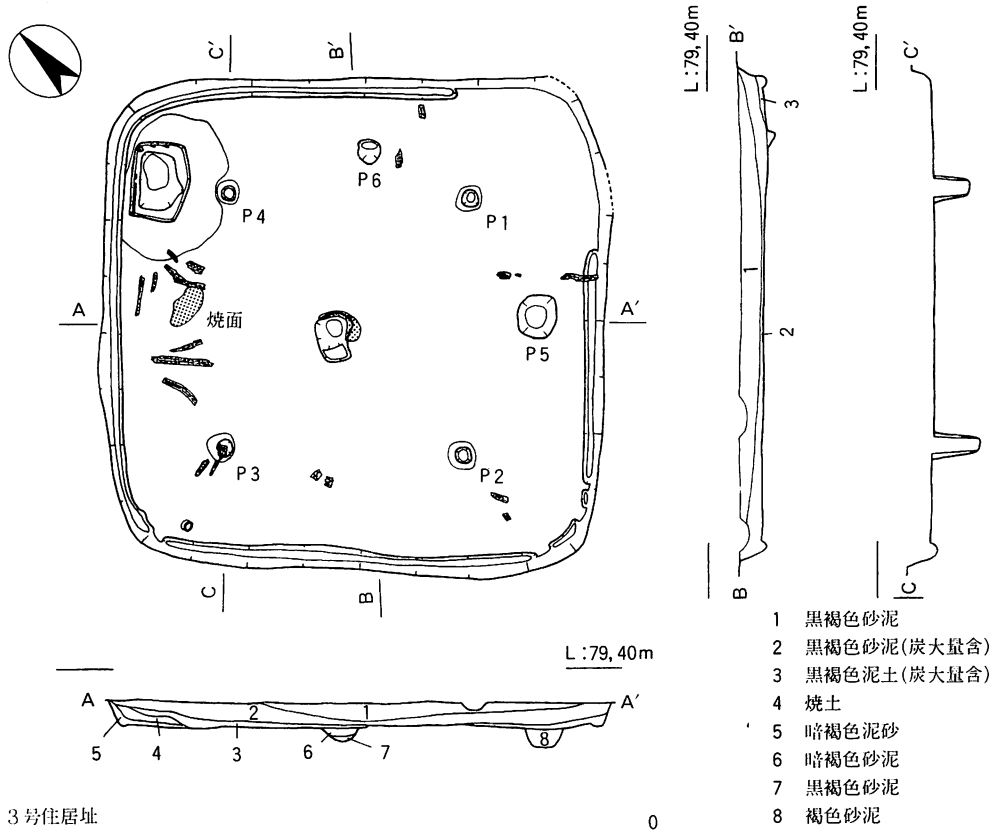
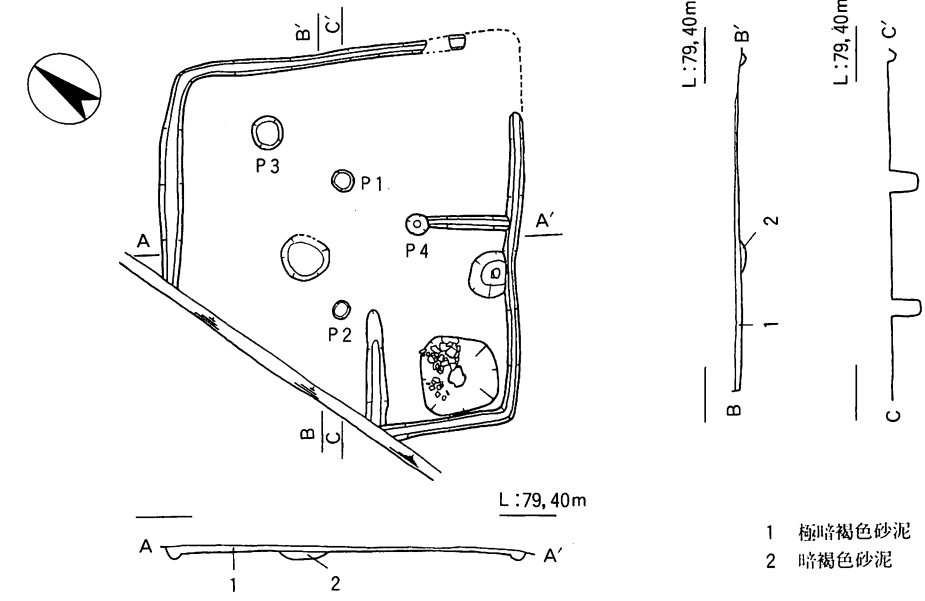
1号住居址



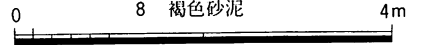
2号住居址

竖穴住居址实测图





竪穴住居址実測図

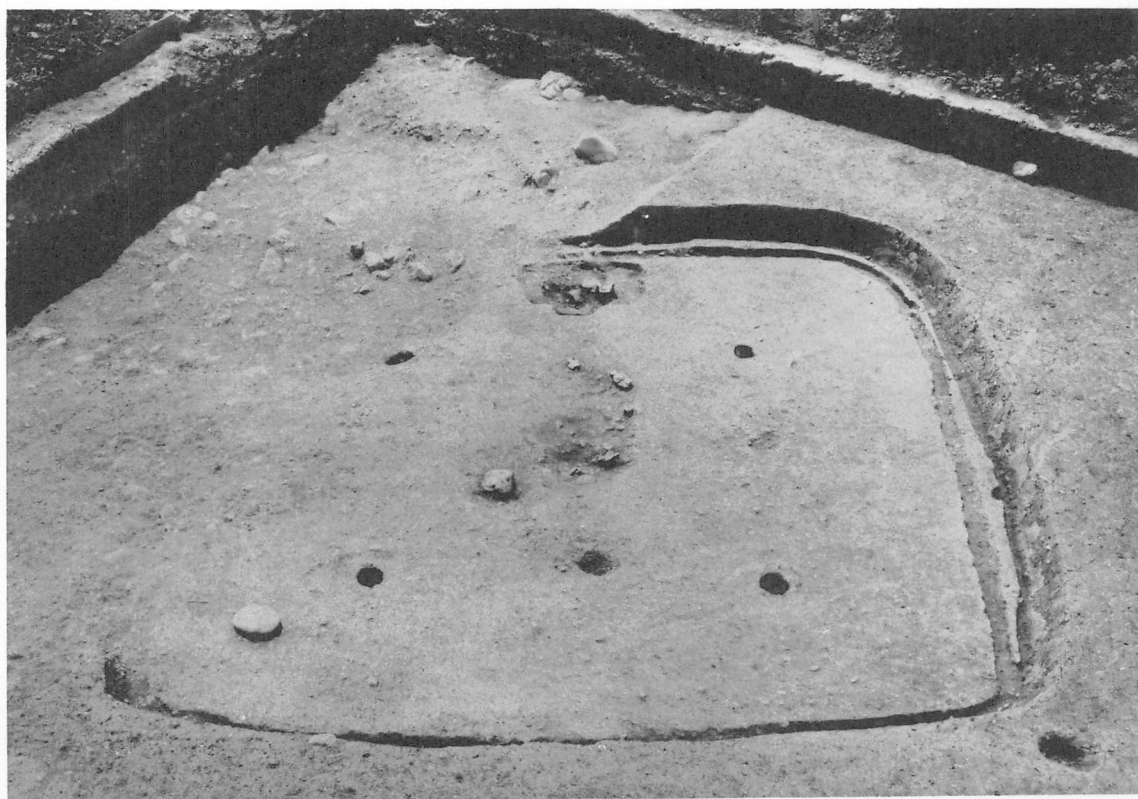




1 調査地遠景



2 調査区全景



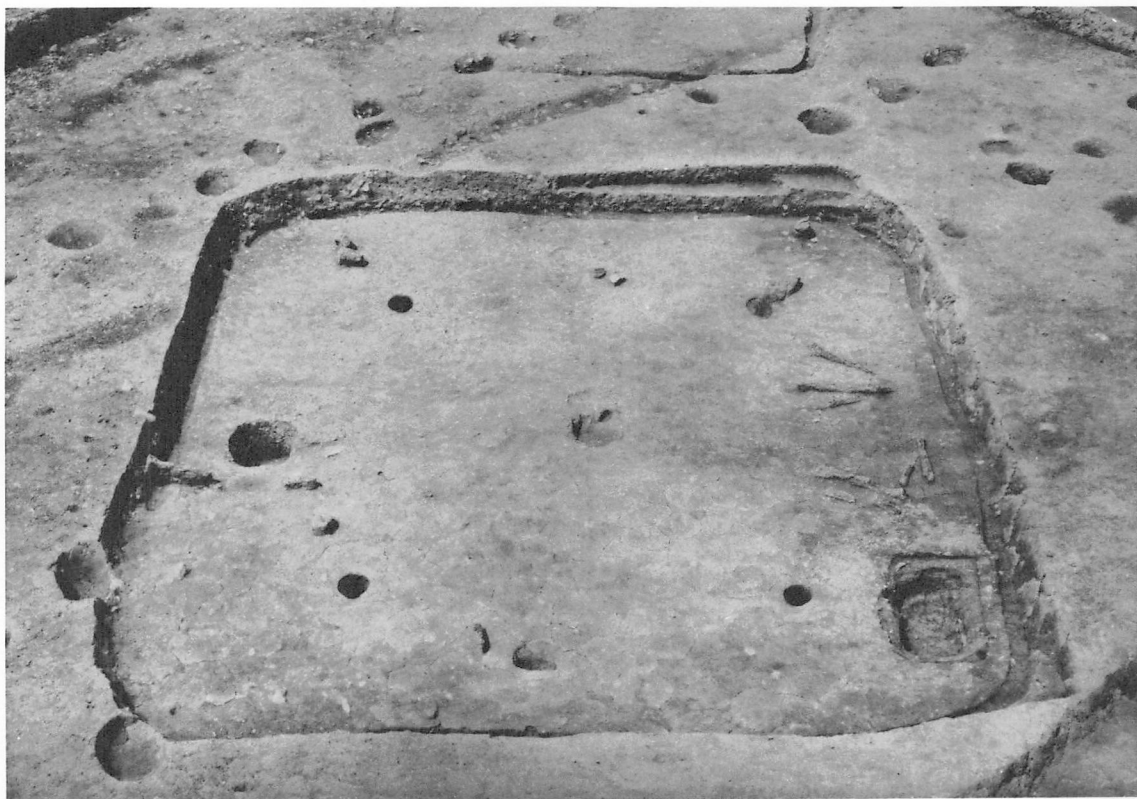
1 2号住居址全景



2 1号住居址全景



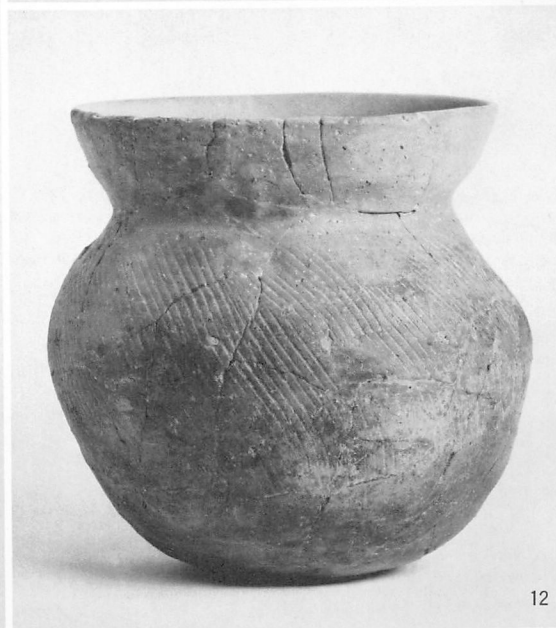
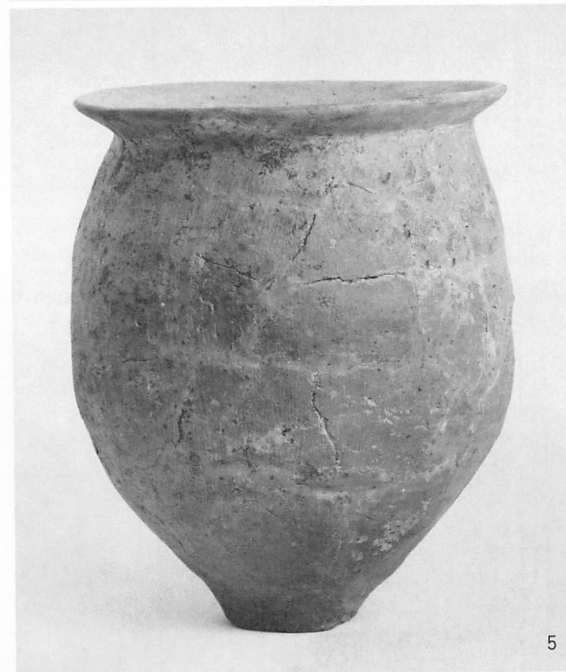
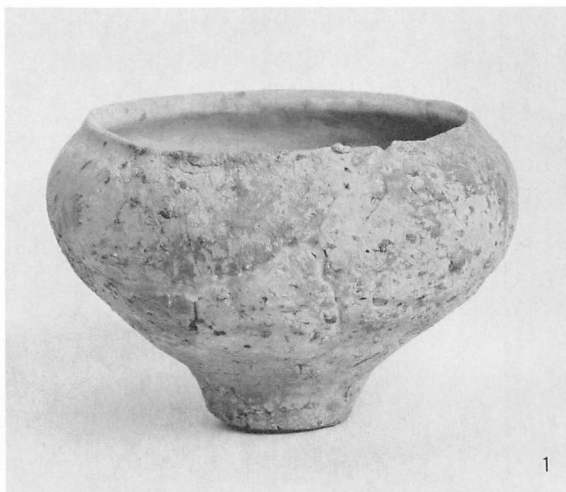
3 1号住居址土器出土状况



1 3号住居址全景



2 4号住居址全景



1～4号住居址・SD5出土土器

植物園北遺跡発掘調査概報

昭和59年度

発行日 昭和60年3月31日

発行 京都市文化観光局
〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町13 京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
〒602 京都市上京区今出川通大宮東入ル元伊佐町265-1
TEL(075)415-0521

印刷 (有) 真 陽 社
〒600 京都市下京区油小路綾小路下ル風早町566
TEL(075)351-6034